

青海モンゴル族

★チベット化、モンゴル化、漢化★

青い湖を意味するフフノールというモンゴル語でその名が知られる青海（省）地域を含むチベット高原へのモンゴル人の本格的な参入は17世紀だった。ゲルク派の要請を受けて、現新疆ウイグル自治区に本拠地を置くオイラド・ホシヨード部が、1630年代チベット高原に進軍しチベット各部族を統一し、チベット仏教におけるゲルク派の最高地位を確立した。18世紀、清に敗北したことを契機に、チベット高原におけるホシヨードの勢力は急速に衰退し始め、多くの人々がチベット部族に逃げ込み、1950年代に行なわれた共和国の民族識別事業でチベット族に算入された。この事業でモンゴル族と識別された人々やその末裔は現在の青海モンゴル族となる。現在の青海モンゴル族は、おもに海西モンゴル族チベット族自治州と海北チベット族自治州および黄南チベット族自治州河南モンゴル族自治県に分布している（次頁図参照、2010年現在9万9815人）。

これらの青海モンゴル族は、程度の違いこそあれ、共通に地域的なマジオリティであるチベット人の影響を深く受け、言語文化的にいわばチベット化が進んでいた。この流れは、民族識別やそれに基づく民族区域自治制度を基盤とする1950年代

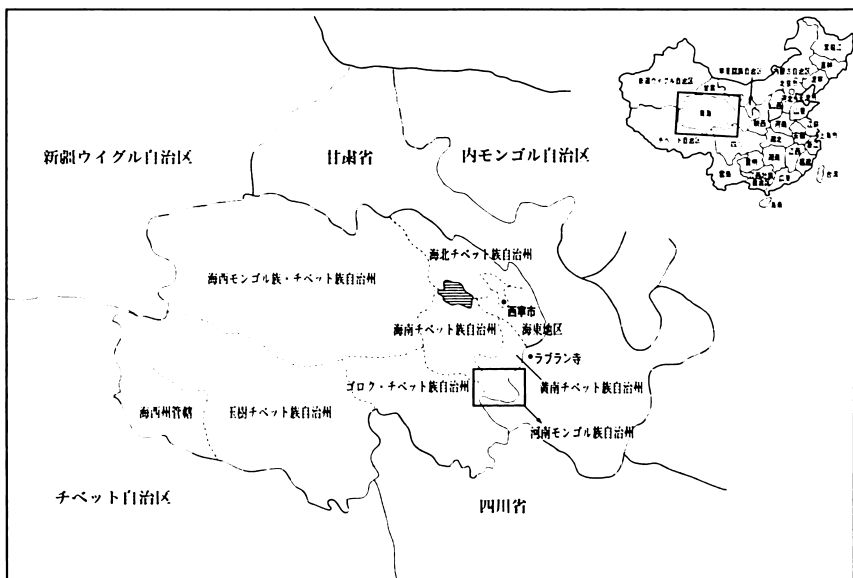


図 青海省における河南モンゴル族自治県

の中国の民族政策が実施されるまで、とくに顕著だった。民族政策の実施に伴い、彼らのモンゴル族としての民族意識が、地方行政や文化政策などの領域において発現し強化され、いわばモンゴル化の流れが見られた。21世紀以降、共和国の西部大開発事業の展開に伴い、それまでのモンゴル化の傾向に歯止めがかけられ、生業経済や言語文化などの領域における定住化、漢化の流れが表れてきた。三つの流れをより鮮明に物語っているのが、河南モンゴル族自治県の事例だ。

私が初めて青海モンゴル族と出会ったのは、私が西北民族大学という少数民族の学生を育成する大学に進学した1985年だった。この大学において、ほとんどの学部の教授用言語が漢語だったが、唯一、少数民族言語文学という学部には、モンゴル語とチベット語で授業を行なう二つの学科が設置されていた。そして、両学科のいずれにも青海モンゴル族の学生が所属していた。一方、モンゴル語学科に所属する彼らが話すモンゴル語は、当時の私にはほとんど聞き取れず、まるでチベット語のよ

うなものだった。他方、チベット語学科にいる彼らの第一言語はチベット語で、モンゴル語が全く話せなかった。前者はおもに海西モンゴル族チベット族自治州、後者は河南モンゴル族自治州から来た学生だった。漢化が進む内モンゴルで育った私にとって、チベット語しか話せないモンゴル人は、民族的な同胞であると同時に文化的な他者でもあるという意味において新鮮でユニークな存在だった。では、彼らの民族意識とはどのようなものか。これが私の研究テーマになった。

1995年初めて自治県を訪れた私は、人々から「アバ」と呼ばれた。彼らは自分たちのことを「ソツゴ」という。アバは漢族あるいは回族の人々、ソツゴはモンゴル人を指示するアムド・チベット語だ。こうした言葉の意味が分かるようになった私は、そう呼ばれることに違和感を持った。私もソツゴだと説明するものの、アバと呼ばれ続けてきた。アバは、上記以外、その意味の展開として非チベット語母語話者、つまり、文化的な他者一般も指す。ソツゴは、原理的にモンゴルやモンゴル人一般を指すが、現実的に自治県や自治県のモンゴル人だけを指すものとして使用されるケースが多い。言葉の意味が依存するこうした文脈が分かるようになってから、アバと呼ばれることに取り立てて違和感を持たなくなつた私が調べた限り、どうやら、本来「父」を意味するアバという語が、現在のような拡がりをもつようになったのは、1950年代の「チベット反乱」の時で、それほど昔のことではなかった。「反乱」が平定され、人々が投降した際に、「お父様、私を殺さないで」と人民解放軍に命を乞つた。これを機に、アバは他者一般を指示する抽象表現になったようだ。

チベット語で自他を表すという事実からだけでも自治県のチベット化の深さが窺えよう。ソツゴを自称する自治県の人々は、周囲のチベット人をチベット語で「ウオレ」と呼んでおり、ソグ・ザへ（モ



写真1 ソグ・ザヘ（右側）と伝統的なモンゴル服（左側）を着用し祭に参加した友人（1996年）

倒的に人口的な優勢を占める環境のなかで、数百年も暮らしてきた自然の流れであろう。

だが、1950年代のモンゴル族自治県の設立以来、とりわけ地域外部のモンゴル諸族との接触が頻繁になる1980年以降、ソツゴの人たちのモンゴル民族としての意識が強まり始めた。このことを明示したのは、ソグ・ザヘとは全く異なる、いわば内モンゴル様式の伝統的なモンゴル服の登場（写真1）、学校教育におけるモンゴル語の導入などである。後者について言えば、それは、第一言語であるチベット語による教育を是正し、民族言語であるべきモンゴル語を学校教育に導入するという社会運動でもあった。内モンゴルから教科書を採用し、教育の現場に内モンゴルの教員を招聘するなど、内モンゴルはモンゴル族の模範として想像され位置づけられた。内モンゴルを基準に展開したこうし

ンゴル服）といったエスニック・マークーを持ち、周囲のチベットとの差異化を図る。だがその相違は地域の文脈に依存しており、必ずしも明瞭ではない。自治県で長年暮らす漢族や回族の人々さえ、チベット人を蔑称する「アロ」という言葉を用いて、そのままソツゴの人たちを指す。非チベット語母語話者にとつてウォレとソツゴの相違はもはや存在しない。こうしたチベット化は、チベット人が圧

たモンゴル化の流れは、1990年代中葉に高揚を迎えた。モンゴル語で学校教育を受けた生徒が自力で内モンゴルに進学することすらでき、民族言語の復活運動は成功を取めたのである。

ところが、この成功は同時にモンゴル化に歯止めをかける契機の一つとなった。実際内モンゴルに進学した学生の多くは、そこで漢語で教育を受けざるを得ず、漢化が深化している内モンゴルの現実を直視した。内モンゴルに進出したことに、実質的な成果があつたとすれば、それは漢文化をその中心である中原地域により近いところで体験したことにある。卒業して郷土に帰つた彼らを待ち受けているのも、ほとんど漢語しか求められない職場だつた。さらに、彼らの故郷に展開していたのは、西部大開発という国家プロジェクトの延長としての、日常生活における定住化、学校教育における漢語化である。定住化政策の推進で確かに立派な固定家屋が増えたものの（写真2）、近親交配による家畜の質の低下、土地の縄張りをめぐる親戚同士のもめごと、人間同士の猜疑心も増加する。バイリンガル教育とは言うものの、学校の現場における漢語の比重が高まつたため、言語コミュニケーションや宗教信仰における世代間の溝、互いを文化的な他者と見る状況が生まれつつある。

初めに「アバ」と呼ばれることに違和感を持ち、のちにそう呼ばれることに違和感を持たなくなつた私は、今やむしろ、いつか、自分が地域の人々に「アバ」と呼ばれなくなるのではないかと、危惧している。もしそうなつた場合、彼らは自分たちのことも「ソツゴ」と呼ばなくなつていたのであろう。こうした多様な自他称の存在は、河南モンゴル族自治県だけではなく、少数民族という存在を産み出してきた歴史的社会的な文脈を考える上でも重要なファクターとなる。それだけに同胞であると同時に他者として、彼らを研究してきた私は、あえて彼らに「アバ」と呼び続けられたいものである。



写真2 河南モンゴル族自治県の中心地で、牧畜民の為に建てられた定住家屋（2011年）

さて、私の最初の研究テーマは人々の民族意識だったが、チベット化・モンゴル化・漢化をめぐるこれまでの記述は、まるで彼らは本来の民族意識というものを持たないように思われるかもしれない。事実、その通りである。本来の民族意識というものはなく、民族意識とは、社会的状況の変化のなかでその都度創り出されていくものである。このことを教えてくれたのは、河南モンゴル族自治県の事例だった。だがこのことは、はたして河南モンゴル族自治県や青海モンゴルに限ったことであろうか。

（シンジルト）

内モンゴルを知る 0 章
ホルジギン・ブレンサイン(編著)



9784750342238



1920336020000

ISBN978-4-7503-4223-8

C0336 ¥2000E

定価▶本体2,000円+税

60
章

を知るための

内モンゴル

ホルジギン・ブレンサイン(編著)
赤坂恒明(編集協力)



135



135
ニホ
ア
ス
カ
ト
ー
ク

内モンゴル

を知るための

60
章

明石書店

ボルジギン・ブレンサイン (編著)
赤坂恒明 (編集協力)



内モンゴル
を知るための
60
章

赤坂恒明 (編集協力)

明石書店